



## 安全で健康な、そして楽しい夏休みに

6/27(木)の地元新聞に「夏休み廃止や短縮希望60%」との記事を目にしました。「子供が家にいると生活費がかかる」が主な理由だそうです。ショックでした。

夏休みはいつからあるのか気になり、ネットで検索してみました。

夏休みは、1881年（明治14年）から文部省が夏季休業日と定めたことで誕生しました。



日本の教育機関の場合、正式名称は「夏季休業」です。校舎などに冷房設備がない場合が多く、太平洋高気圧支配下での授業が暑熱により困難なので、その間を休業とするためとされています。そして、その期間に期待される教育効果の主たるものは、普段学校では体験することの出来ないことへの児童・生徒の挑戦とされます。小中学校では一般的に、漢字や計算などの基本的な学習や日記などの夏休みの宿題があります。小学校に関しては、大正時代の尋常小学校の時からこのモデルは変わっていません。



まとめると、日本の夏が暑すぎて勉強にならないからなのでしょう。教室にエアコンが設置されて5~6年ですが、同時に熱中症への警戒も高まり、教室以外にエアコンのない学校の夏は今も厳しいです。期待される過ごし方は、普段できない経験をすると言われていますが、大人は普段と変わらない生活ですから簡単ではありません。

### <見能林町の兼業農家で大きくなった吉積少年の夏休みの記憶>

- ・入学まで 稲作の収穫期(農繁期)は親戚に預けられていた。言うことを聞かない子だったらしい。
- ・小学生 自分のことが自分でできるようになったからか、ばあちゃんの手にも負えなかったからか預けられなくなった。朝は運動場でラジオ体操、週に2回はプール開放(小2の時にプールができ、傍示別で泳げた)、当時は学校で自転車検定がありその合格証を手に小4で自転車デビュー。近所の子と北の脇海岸での磯あそびに夢中になった。これぐらいから農作業のできる一人前として数えられるようになり、ひたすら田んぼの手伝い。しんどくていやなのに、バインダー、コンバインやトラクターといった農機具の導入期で心惹かれるものもあった。が、暑くて、はしかくて大変だった。農作業を終えた夕方、父のバイクの後ろにまたがり北の脇海水浴場へ。夕暮れの温んだ浜で海水浴(まあ、体のいいクールダウンとほこり落とし)、帰ってお風呂に入って、晩ご飯食べてバタンキュー。特にお盆時期は稲刈り/脱穀の最盛期で、阿波おどりを楽しんだことなどなかった。とにかく、田んぼで生活していたようなものだった。最初と最後の1週間ずつが自由だったので、宿題などはその時に一気にやっていた。
- ・中学生 部活の練習があることを言い訳に、どうしても人手のいる時以外は田んぼから離れた。思春期で自分がはしかかった。農作業は4歳年下の弟が手伝うようになった。



特別な思い出はありませんが、農繁期の打ち上げ(さのぼり)は、ちょっと豪華な食卓を家族で囲んで楽しかったです。ご家庭ごとになるでしょうが、何よりも安全で健康な生活をお過ごしください。困り事などございましたら、ご連絡ください。

※ 保護者の皆様には、プール監視当番、個人懇談、サマースクールなど、ご多用な折とは存じますが、児童の成長支援にご理解ご協力をよろしくお願いいたします。